

## 困りを抱える児童生徒への効果的な SST (1 年次)

### —学級や家庭と一体となって行う LD 等通級指導教室における SST の取組—

馬場 啓輔 (京都市総合教育センター研究課 研究員)

平成 28 年度、全国の公立小中学校で通常学級に在籍し、通級指導を受けた児童生徒が 9 万 8000 人を超えたことが発表された。この人数は調査を開始した平成 5 年以降 23 年連続で増加しており、特に平成 18 年から LD 等通級指導教室対象となった ADHD, LD, 自閉症, 情緒障害の児童生徒数は、近年飛躍的に増加している。本市においても同じ傾向が見られ、これらの困りを抱えた児童へのよりよい指導について実践と研究を進めているところである。そこで、今年度、小学校の LD 等通級指導教室におけるソーシャルスキルトレーニング(以下 SST)に焦点を当て、児童の実態把握や評価のあり方、スキルの日常への般化のための支援の方法などについて、在籍学級や家庭との連携や指導形態に焦点を当て実践・考察した。

## 第 1 章 子どもたちのソーシャルスキルを高めるために

### 第 1 節 困りを抱える子どもたち

平成 28 年の、ADHD, LD, 自閉症, 情緒障害の児童生徒の LD 等通級指導教室への入級者数は 10 年前と比べて約 6 倍となっており、通級による指導を受けている児童生徒全体の約 60% である。これは近年の ADHD, LD, 自閉症, 情緒障害のある児童生徒への支援の需要の高まりを明確に示す例である。

本研究では、特に LD 等の困りを抱える児童生徒に対して効果的な SST のあり方について考察を進める。

### 第 2 節 ソーシャルスキルとは

本研究では、ソーシャルスキルを「自己の感情や認知を調節し、人との関わりや日常生活の中で適切な行動をとる能力」、SST をこの能力を育成するための指導法としてとらえる。

LD 等支援を必要とする児童生徒においては、認知面や行動面、感覚面などの発達に偏りがあり、普通に学校生活や家庭生活を送るだけでは好ましいソーシャルスキルを獲得できず、スムーズな対人関係を築くことが難しい場合がある。適切なサポートを受け、所属する集団や環境に求められるソーシャルスキルを身につけることができないと、現在の学校生活への不適應等の原因となるだけでなく、生涯にわたって社会への不適應や心理的不調の原因となりうると考えられる。

また、ソーシャルスキルが未熟であるために対人関係でつまずき、そのつまずきから生まれるストレスを軽減、解消するためのソーシャルスキルも未熟であるとしたら、ストレスから受けるダメージは大人よりもはるかに大きなものになると考えられる。

これらのことから、児童生徒の過ごす通常学級や、LD 等通級指導教室、家庭において、ソーシャルスキルの向上を目指し、それぞれの児童生徒の実態に合わせた SST を行うこと、ソーシャルスキルの獲得が苦手とされる LD 等支援を必要とする児童生徒に対して、ストレスへの対処に関わる SST を行うことが重要であると考えられる。

## 第 2 章 効果的な SST を目指して

### 第 1 節 本研究について

本市の LD 等通級指導教室での SST 指導は、そのほとんどが個別指導となっており、SST 実施の際に用いられるのは、想定された場面での適切な反応はどのようなものかを考えたり、その考えを指導者と話し合ったりしたうえで、日常生活の場面でスキルを発揮できるようにするシミュレーション学習である。しかし、図 1 に示すように、個別指導であるという制約により「知る」段階で終了する指導が多く、SST が本来目指すソーシャルスキルの般化に関わるそれ以降の指導は、LD 等通級指導教室以外の場所に委ねられることが多い。

そうすると、仮に学級や家庭でのサポート

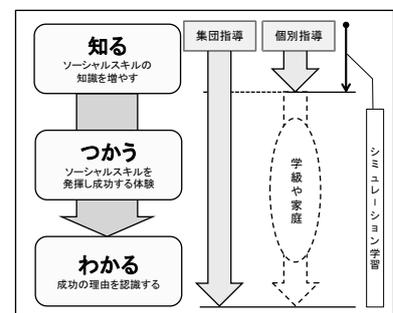


図 1 集団指導 SST と個別指導 SST

が得られなければ、「つかう」「わかる」段階に至ることができず、指導したスキルが般化に向かわない。これを踏まえ、LD 等通級指導教室での SST の内容だけではなく学級、家庭とも連携した SST

の在り方を、指導実践をもとに考察していく。

## 第2節 実践の内容

実践での SST の流れは図 2 に示す通りである。

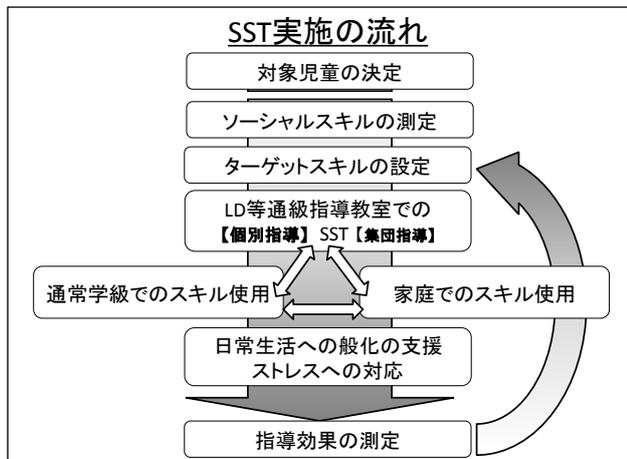


図 2 SST 実施の流れ

ソーシャルスキルの測定及び指導効果の測定を行うために既存の尺度を利用したソーシャルスキルチェック表を作成、電算化し、視覚的に対象児童の変容を見とることができるようにした。これを基に、児童一人一人の困りに合わせた SST を行うとともに、児童が中心となって行う情報共有やストレスの解消に焦点を絞った SST を行った。

## 第3章 指導の実践

### 第1節 ターゲットスキルの設定

学級担任、LD 等通級指導教室担当者、児童の三者のソーシャルスキルについての評価を照らし合わせた。そこで明らかとなった得意とするスキルと苦手とするスキルを児童に提示し、児童自身が改善、克服を図りたいスキルを選び、これをターゲットスキルとした。児童自身がターゲットスキルを選択決定することで、毎回の指導時の学習の目標が明確になり、SST にも主体的に参加する児童の様子が見られた。

### 第2節 SST 指導の実践

個別指導、集団指導の SST を、それぞれ 2 事例ずつ計 4 事例を研究対象とした。対象児童 8 名それぞれにターゲットスキルを設定し、具体的な指導計画を立て週に 1 度、1 回あたり 10 分から 20 分の指導時間を設定した。

ここでは児童が繰り返しスキルを使用することのできる環境設定をすることや、児童自身が今どのようなスモールステップに取り組んでいるのかを意識し、日常生活場面で円滑にスキルを使用し、般化につなげることができるように、指導に

連続性を持たせることに留意した。

## 第3節 ターゲットスキルの般化に向けて

学んだスキルの使用場所である学級や家庭で担任や保護者がより頻繁に児童に声掛けをできるように、また、より具体的に声を掛けやすくなるようにカード型補助教材を作成した。LD 等通級指導教室での SST 後、学んだスキルを日常場面で使用することをミッションという形で提示し、在籍学級や家庭でスキルを使用したときに記録していくこととした。学級担任からは「カードに書かれていることを子どもと確認しながら進め、スキルを意識しながら活動ができた」という声が聞かれ、児童が在籍学級での担任の支援のもとでスキル使用に向かうことができた様子や、担任自身が LD 等通級指導教室での指導内容に理解を深める様子を見て取ることができた。

## 第4章 研究の成果と課題

### 第1節 チェック表による変容の見とり

ソーシャルスキルチェック表を用いたターゲットスキル設定やその変容の見とりは、ソーシャルスキルについての児童理解や評価を容易なものにし、今回の取組による成果を含め様々な場面で活用することができる可能性があることが明らかになった。一方で、学級担任、LD 等通級指導教室、児童の三者それぞれの評価には特徴的な差異がいくつか認められ、その要因の考察及び改善のための実践を行った。

### 第2節 より効果的な SST を行うために

実践を進める中で、SST における主要な 5 つの技法を示した指導案の在り方やそれぞれの SST に含まれるソーシャルスキルに関わる指導要素の多様性などが明らかとなった。また、指導時間の一部を統合することによって、日常場面に近い形でスキルを使用することができる指導形態も、LD 等通級指導教室での個別指導においてより効果的な SST を行うために有効な方法であると考えられた。

今回の研究での実践によって、困りを抱えるそれぞれの児童のソーシャルスキルに関わる力を育成することができ、日常場面へのソーシャルスキルの般化も促すことができたと考えられる。今後は、より効果的な SST のあり方や学んだスキルを継続して使用するための学級担任の関わり方、スキルの般化を行う場所である学級・学校での指導や支援の在り方について、より効果的な SST 指導を踏まえ考察していきたい。